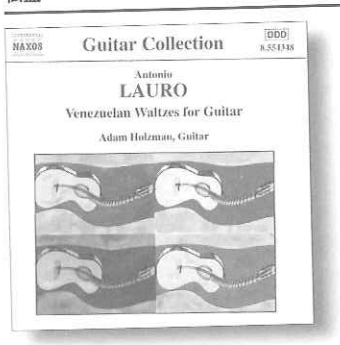
Rafael Andia (G)
Harmonia Mundi France 905246
仏盤

トゥリーナ：ギター作品集／アンディア

〔セビリャーナOp.29、ファンダンギーリョOp.36、ラファガOp.53、ソナタOp.61、タレガ讃歌Op.69、タンゴOp.8-2、5つのジプシー舞曲Op.55（トゥリーナ）〕

●ピアノ作品のCDを目にする機会が多く、また本誌（No.417）で特集が組まれたトゥリーナのギター作品集。トゥリーナだけでアルバムが組まれる機会は少なかったように感じるが、もともとギター作品の少ない作曲家で、彼の作品が持つ独特の詩情がアルバム全体としてのバランス調整をむずかしくすることが背景にあったのかもしれない。今回、フランスの（現代作品からバロック期まで幅広いレパートリーを持っている）アンディアが彼のオリジナル作品と一部のピアノ曲からの編曲作品をまとめてアルバムにした。最後の曲の5曲目〈サクロモンテ〉はかつてアルメイダが編曲、録音を行なっていたが、他の4曲もギターで演奏されるとトゥリーナの音楽の源泉をなすスペイン音楽の感性が純粋に感じられ、オリジナル・ギター曲のような印象を受ける。

アンディアは微妙にテンポを変化させてトゥリーナ作品の持つジプシー的でダークな感覚をギターで巧みに描いている。



Adam Holzman (G)
NAXOS 8.554348
独盤

ラウロ：ベネズエラ風ワルツ集／ホルツマン

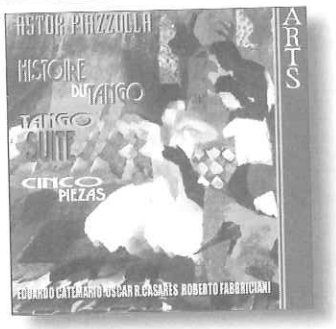
〔セイス・ポル・デレーチョ、マリア・カロリーナ、エル・マラビーノ、マリア・ルイサ、アンゴストゥーラ、オクマレよさらば、パペロン、ネリー、ベネズエラ組曲、エル・ニーニョ、4つのベネズエラ風ワルツ、エル・ネグリート、ラ・ガティーラ、トリプティコ、ベネズエラの童謡による変奏曲、スライ、カローラ（以上ラウロ）〕

●本誌で連載が続いているラウロの作品集、一部ワルツではない作品も含まれているが、同類ということでタイトルにまとめられているようだ。演奏はNAXOSでポンセ作品集を好演奏したホルツマンである。

ラウロの作品の生命は、（単純な）リズムに乗って演奏される愛らしい旋律であるが、これら諸作品をまとめて聴くと湧き出るメロディーメーカーとしての才能が実感できる。

感覚的にラウロに合うのは実は短調の方かもしれない。〈オクマレよさらば〉〈ベネズエラ風ワルツ第3番〉などの哀愁感溢れる響きには、また異なるラウロの感性を聴くことができる。

ホルツマンは情に流れることなく、ワルツなどの作品の構成感（型式感）を崩すことなく、その中で各作品の個性を活かしつつ歌を表現している。



Edoardo Catemario (G), Oscar Roberto Casares+(G), Roberto Fabbriciani*(Fl)
ARTS 47559-2
独盤

A.Piazzolla:Complete works with Guitar／カテマリオ

〔タンゴの歴史*、5つの小品、タンゴ組曲+、大いなる悲しみ*、フーガと神秘*、ハキント・チクラーナ（ピアソラ）〕

●留まるところをしらないピアソラ・ブーム。ミッドプライスレーベルであるARTSからもカテマリオの演奏でギター作品全集が出た（オリジナルのギターを含む作品はすべて含まれている）。その上、3曲の編曲作品が含まれており、内容的（レパートリー的）には充実している。

カテマリオ（初めて写真を見た、演奏と比べなかなかいかつそうであるが）はなかなか軽快な演奏である。〈タンゴの歴史〉では、フルートの音色に良くマッチした音色で合わせ、ソロでは逆に作品の持つ深刻な表現を活かした渋い演奏が、〈5つの小品〉の歌わせ方などに聴くことができる。

デュオの相手を務めているカサレスもラテン系のギターでは有名であり、最近は国内盤としてのタンゴ・ギターアルバムをBANDAIレーベル（Tango Argentino y Astor Piazzolla：APCE-5636）からリリースしているので、演奏を聴かれた方もあるかもしれない。2人の演奏における微妙な感性の差異が曲に緊張感を与えている。

Sebastien Vachez (G)
MANDARA MAN 4949
フランス盤

Guitare+ Vol.35:Comme une Saudade／ヴァシェ

〔サウダージ第3番、フランク・ザッパ讃歌、フォーコ、タンゴ・アン・スカイ（ディアンス）／サウダージのように、カヴァティーナ、スケルツォ＝タンゴ（ヴァシュ）／祈りと踊り（ロドリーゴ）／帰郷（バルボー）〕

●フランスのGuitare+シリーズはギターを多様的に捉える面白い企画を数多く出しているが（今回で35巻）、今回はフランスのヴァシュによる、広い意味でサウダージをテーマにした作品集である（演奏者の自作のタイトルからとられている）。フランスでサウダージと言えばディアンスということで、ここでも〈サウダージ第3番〉をはじめ、ディアンスのエキセントリックな作品がアルバムのメインになっているようだ。

ヴァシュはパリではミクルカ、ベルバに学び、ディアンスにもマスタークラスで学んでいる。作曲もこのアルバムで聴かれるように行なっており、クロスオーバー的な部分（作品、演奏）はディアンス譲りの部分もあろう。このアルバムのタイトルである〈サウダージのように〉はディアンスに献呈されている。演奏自体も澄んだ音色と柔軟なリズム感で聴きやすい。

バルボーはカタルーニャ生まれの若手ギタリストであるが、この〈帰郷〉は非常にロマンチックなギターの歌心をすべて出したような甘美な作品。